

特集

いま知っておきたい! 新学習指導要領を読み解く キーワード

巻頭エッセイ

表紙裏 誰もが“challenger” 田口 亜希

特集

01 いま知っておきたい! 新学習指導要領を読み解くキーワード

根岸 雅史／津久井 貴之／工藤 洋路／中西 浩一／中島 真紀子／
田嶋 美砂子／松沢 伸二／池野 修／谷口 友隆／今井 裕之／
日基 滋之／竹内 理／酒井 英樹／金丸 紋子／池田 周／鈴木 悟／
櫻葉 みつ子／吉田 晴世／堀田 龍也

連載

- 11 Essay Timely Team-Teaching Tips Cameron Blain
- 11 リクツで納得! 学校英文法の「文法」ケイタイは音の問題 巨理 陽一
- 12 英語教師のための基礎講座 小学校から見た小中接続 (2) 一指導と評価 中西 浩一
- 13 TEN通信 三省堂 機関誌アーカイブのお知らせ / NEW CROWN ー これまでと、これから

誰もが“challenger”

田口 亜希 Taguchi Aki



パラリンピック射撃元日本代表。25歳の時、脊髄の血管の病気を発症し車いす生活になる。退院後、知人の誘いで射撃を始め、アテネ、北京、ロンドンと3大会連続でパラリンピックに出場。日本郵船（株）広報グループ 社会貢献チームに勤務し、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会アスリート委員、東京2020聖火リレー公式アンバサダー等を務める。

困難に直面した時は、まず目の前にあるできることを一つずつ見つけて前に進むようにしてきました。

できることがある、できることが増えていくというのが嬉しいです。

高校1年生の夏、アメリカのオレゴン州で短期海外研修に参加した時、ホームステイ先の子どもとコミュニケーションが取れなかったことがとても悔しかったです。英語を話せるようになりたくて、帰国してからは英語の勉強に力を入れるようになり、授業以外でも積極的にネイティブの先生に話しかけました。

それから3年後、ホームステイ先を再度訪ねると、英語でコミュニケーションが取れるようになってとても嬉しかったです。その経験から英語を使う仕事に就きたいと思うようになり、大学卒業後は客船「飛鳥」にパーサーとして乗務しました。

飛鳥での仕事は充実し、やりがいを感じていましたが、25歳の時に突然身体全体に激痛が走り病院に運ばれました。病院で気づいた時には両脚が動かなくなっており、検査の結果、脊髄の血管が破裂して脊髄の神経を傷つけていることが判明しました。お医者さんから「現在の医学では、傷ついた脊髄の神経を手術などでつなぐことはできない。君は一生車いすの生活だよ」と伝えられた時は、何を言われているのか全く理解できませんでした。それまで普通にできたことが全くでき

なくなり、車いすですらどうやって生きていくのかわからず、「こんな身体ではもう一生働けないだろう。一生家の中で暮らすのだろう」と思ったこともありました。

でも、お見舞いに来てくれる友人や同僚が普通に働いたり、遊んだりして、充実した日々を過ごしている姿を見て、「何もしなくても一日一日は過ぎていく。それなら何かしなないと暮らさない。前に進みたい」と思い、リハビリに励むようになりました。

退院後は新たな仕事に就き、仕事以外に何か趣味を持ちたいと思っていた時に、病院で同室だった知人から射撃を紹介され、ビームライフルを始めました。その後コーチの勧めで実弾を使用するエアライフル、22口径のライフルに転向し、アテネ、北京、ロンドンと3大会連続でパラリンピックに出場しました。

射撃を始めた当初は、パラリンピックを目指していたわけではなく、ただ単に自分ができることがあるのが嬉しかったのです。練習に行けることが嬉しく、国際大会に出場するのも、そんなことが車いすに乗っていてもできるというのが嬉しかったのです。

今もそうですが、自分でできることがあること、そしてできることが増えていくのが嬉しい。私にとっては、英語を一生懸命勉強したこと、飛鳥にパーサーとして乗務したこと、射撃でパラリンピックに出たこと、これら全て、何か特別なことをしたのではなく、目の前にある今自分ができていることを一生懸命やったら、そこについてきた結果だと思っています。現在、東京2020大会でいくつもの委員などを務めていますが、そのような大役が務まるのかいつも不安になります。でも背伸びはせず、自分のできることを一生懸命やろうと考えて臨んでいます。

病気になるまで「障がい者」という単語を使ったことがなく、発病当時は“handicapped person”と言う人もいましたが、自分にはしっくりきていませんでした。仕事復帰後、シンガポールから出張で来た同僚と食事した際「障がい者って英語でどのように言うの」と聞いたところ、彼に「正しい英語ではないかもしれないけど、僕は君たちのことを“challenger”って呼ぶよ」と言われました。私にとってその言葉は、不安になったり、何か新しい事を始めるのに悩んだりした時、今も心の支えになっています。



客船「飛鳥」のパーサー時代。



緊張の瞬間。息を止め、一発に集中する。狙うは50m先の直径10.4mmの10点圏。



決勝の様子。この試合で2012年ロンドンパラリンピック出場枠を獲得した。

いま知っておきたい！ 新学習指導要領を読み解く キーワード

小学校は2020年度から、中学校は2021年度から新しい学習指導要領が全面実施されます。

本特集では、中学校での実施を翌年度に控えた今、
子どもたちの学びの方向性を決める新学習指導要領がどのようなものなのか、
キーワードを手がかりに、19名の先生がたに解説いただきます。

キーワード

何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶか／知識及び技能／思考力、判断力、表現力等／
学びに向かう力、人間性等／主体的・対話的で深い学び／目的や場面、状況／必要な情報、概要、要点／
日常的话题、社会的な話題／言語の使用場面、働き／即興的なやり取り／語彙(受容語彙と発信語彙)／
文、文構造及び文法事項／小学校外国語の教科化／英語で授業／小中連携／中高連携／他教科連携／
カリキュラム・マネジメント／ICT(情報通信技術)



何ができるようになるか、 何を学ぶか、どのように学ぶか

根岸 雅史
Negishi Masashi
(東京外国語大学)



新学習指導要領は、来る予測困難な時代においても、子どもたちが自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしいという思いで作成された。社会の変化を見据えた新たな学びへの進化である。

このために、「何ができるようになるかー育成を目指す資質・能力ー」「何を学ぶかー具体的な教育内容の改善・充実ー」「どのように学ぶかー主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善)ー」の3点を明確化している。以下、それぞれを少し詳しく見てみる。

何ができるようになるか

新学習指導要領では、新しい時代を生きる子どもたちに必要な力は次の3つの柱として整理されている。

- 学びを人生や社会に生かそうとする「**学びに向かう力・人間性等**」の^{かん}涵養
- 生きて働く「**知識・技能**」の習得
- 未知の状況にも対応できる「**思考力・判断力・表現力等**」の育成

何を学ぶか

新学習指導要領では、新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた教科・科目等の新設や目標・内容の見直しを行っている。小学校外国語が教科化されたり、高校の新科目「公共」が新設された。また、各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容が構造的に示されている。中学校の外国語で言えば、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の5つの領域ごとに3つの目標が、「～できるようにする」というCAN-DO形式で記述されている。

どのように学ぶか

新学習指導要領では、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」も重視している。これは、従来の学習指導要領と比べて、かなり踏み込んでいると言える。主体的・対話的で深い学び(「アクティブ・ラーニング」)の視点からの学習過程の改善を図っている。「アクティブ・ラーニング」とは、他者に対して具体的に働きかけたり、対話したりして、身近な問題を解決することとされているが、これは英語としては、現実的な課題を遂行することで**主体的・対話的で深い学び**が実現すると読み替えられるだろう。



知識及び技能

津久井 貴之

Tsukui Takayuki

(お茶の水女子大学附属高等学校)



新学習指導要領では、全ての教科等の目標及び内容が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で再構築された。「知識及び技能」の「知識」とは、音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどに関する知識のことである。また、「技能」とは、それらの知識を5領域における実際のコミュニケーションで活用できる力と言える。「知識」は、それぞれを独立した単なる知識としてどれだけ知っているかではなく、さまざまな言語活動が繰り返し行われる中で技能が習熟・熟達に向かう「生きて働く」知識として活用されるものでなければならない。目的や場面、状況を明確にした言語活動には、そこで自然に用いられる言語材料があり、言語活動と言語材料の関連性をこれまで以上に意識して、さまざまな言語活動を積み重ねていきたい。そのためには、言語活動で生徒が実際に使用した英語を把握するとともに、言語活動のゴールとして想定される具体的な英語のサンプルをあらかじめ教師自身が作成することなどの工夫が、今まで以上に求められる。また、獲得した個別の技能が自分の経験やほかの技能と関連づけられ、主体的に活用できる、つまり「生きて働く」レベルになるには、「知識及び技能」は「思考力、判断力、

表現力等」を高める言語活動の中でも培われるものであり、指導の際に主眼を置く資質・能力は明確にしながらも、相互に行き来しながら育まれるものであるという理解が重要である。

「知識及び技能」として、第2章第2節2(1)に「英語の特徴やきまりに関する事項」が示されている。ここではポイントを2つ挙げておきたい。まず、語彙については、中学卒業までに2,200~2,500語程度を扱うことになる。受容語彙と発信語彙という考え方により、聞いたり読んだりして意味が理解できればよい語彙と、発信の際に使えるレベルまで習得を目指す語彙があることや、領域によって語の使用頻度が違うことを踏まえて「どこまでをどの程度指導するのか」という見きわめが求められる。

文法事項などについては、特に現在完了進行形やSVOC(補語が原形不定詞)、仮定法のうち基本的なものについて、まずは教師がそれらの働きや文法事項が使用される具体的な言語活動について理解を深める必要があるだろう。例えば、仮定法には、「空を飛べればいいのに」のような空想やありえない仮定以外にも、助言をしたり相手の依頼を丁寧に断ったりする働きがあり、よりプラクティカルな使用場面があることも理解しておきたい。



思考力、判断力、表現力等

工藤 洋路

Kudo Yoji

(玉川大学)



新学習指導要領では、「思考力、判断力、表現力等」に関して、「具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、これらを論理的に表現する…」という記載がある。つまり、「思考力、判断力、表現力等」を育成するためには、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などが設定された言語活動に取り組むことが必要であることが示されていると言える。

では、どのようにして、コミュニケーションを行う目的や場面、状況を設定すればよいだろうか。例えば、自己紹介という活動を取り上げてみる。自己紹介それ自体ですでに自分のことを相手に伝えるという目的が見いだせるが、「自分のこと」といっても、どのような状況で誰に向かって自己紹介をするのかによって、その内容は変わってくる。新しく赴任したALTの先生に向かって授業中に行う自己紹介と、アメリカに行って、ホストファミリーに向かって行う自己紹介を比べてみる。どちらにおいても名前を言うのは当然かもしれないが、年齢や住んでいる場所はどうかだろうか。英語の授業で行う自己紹介であれば、ALTの先生は、生徒の学年を知っているはずなので年齢を言う必要はない。ホストファミリーに対しては、日本人の中学生を見て、何歳なのか想像がつかないと思わ

れるので、年齢を伝えてもよい(あらかじめプロフィールを送っているとは思うが)。住んでいる場所に関しては、ホストファミリーに対しては“I live in Tokyo.”(時には“I come from Japan.”)と言うだけで十分である場合が多いであろう。一方、ALTの先生に対しては、その中学校の生徒である時点で、その学校の周辺に住んでいることは容易に想像がつくため、住んでいる場所を言うのであれば“I live near our school.”など、ローカルな説明になる。この文からさらに話題を広げられるなら意味のある内容と言えるが、この1文だけなら、特に住んでいる場所を言う必要はないと言える。

このように、(設定された)目的や場面、状況を考慮しながら、生徒が頭の中で伝える内容を思考し、アイデアをいくつか出した上でその中から何を伝えるべきかを判断し、最終的にはそれを英語で表現することで、「思考→判断→表現」という一連の流れが生まれる。母語であれ外国語であれ、実際のコミュニケーションでは、この流れを無意識に頭の中でたどっていると言える。英語の授業の言語活動においても、目的や場面、状況を踏まえた上で、このプロセスを生徒の頭の中に引き起こすように、指導を工夫していくことが必要となる。



学びに向かう力, 人間性等

中西 浩一
Nakanishi Koichi
(平安女学院大学)



学びに向かう力

ゴールに向かって見通しを持ち、自己の学びを調整しながら粘り強く主体的に学習に取り組む力である。小学校では、外国語の授業において「めあて」「中間評価」「振り返り」という学習の流れを大切にしており、中学校ではさらにそれを充実させたい。生徒が主体的に学習に取り組む力を育成するために、まず1単元あるいは複数の単元ごとに「**つけたい力**」(到達目標)や**評価規準**、それを**実現するための学習過程等**を生徒に示す必要がある。「単元学習指導・評価計画」を、簡単な言葉でA4用紙1枚程度にまとめたものを生徒に配布することをお勧めする。本来それは、学習者である生徒が持つべきものだからである。そして授業において、**形成的評価としての「中間評価」を適宜入れ、生徒がゴールと自身の現状とのギャップに気づき、自己の学びを調整しつつ主体的に学びを深めていけるよう支援することが指導者の役割**であろう。指導者が「教え込む」のではなく、**生徒が主体的に学習に取り組めるよう導いていきたい**ものである。自律(自立)した学習者として生涯学び続ける人となるために。

人間性

多様性を尊重する態度、物事を多角的・多面的に捉える力、考えや立場等が異なる様々な人たちと協働する力、他者や相手を思いやる気持ちや、やさしさなど、新学習指導要領が目ざす「人間性」の育成のために、英語の授業でできることは多々ある。何より英語は「ことば」である。「ことば」でコミュニケーションすることを通して、人はつながっていく。ペアやグループでの学習は、単に英語の練習をするためだけにあるのではない。お互いの学びを支え合いながら共に成長していく過程でもある。仲間と一緒に課題の解決に取り組む中で、相手への思いやりや「協働する力」も育っていくのではないだろうか。それは「教える人」「教えられる人」といった固定化した関係からは生まれない。ペアワークひとつをとっても、「**何のためにするのか(何を目ざしているのか)**」ということ**を常に考える**ことが「英語教育」に携わる指導者に求められる。それぞれの題材を深く読み込み、そこから生徒に何を感じ、考えさせるのか、深い教材研究が必要であろう。「未来」を創り、生き抜くために必要な資質・能力を、一人一人の生徒に育んでいきたいものである。



主体的・対話的で深い学び

中島 真紀子
Nakajima Makiko
(筑波大学附属中学校)



「主体的・対話的で深い学び」は、授業改善の取り組みを活性化していくための重要な視点である。私たち教師は、生涯を通じ意欲的に学び続け、その過程で自己を振り返り、さらなる成長につなげていける自律(自立)した学習者を育てなければならない。そのためには、他者と関わったり、先哲の考え方に触れたりすることで、お互いに学び高め合う機会を豊富に設けることが重要である。この「主体的」であり「対話的」な学びを**実践していくことが、習得・活用・探求のプロセスの中で、総合的かつ多面的に考える力や、問題解決力、創造(想像)力を高める「深い学び」につながるのだと考える**。ではこうした「学び」は、どのような授業の中で実現されるのだろうか。

まず、「**何のために英語を学ぶのか**」という目的意識を生徒にも**たせることが大切**である。なかなか目的をもつことができない生徒も、「入試のため」と考えている生徒もいる。それでも、教師の思いや経験を伝えることで英語学習の目的を問いかけ続けたい。同時に、コミュニケーションの楽しさを多く味わわせ、「**わかった、伝えることができた**」という実感や、「**もっとわかるように、もっと伝えられるようになりたい**」という意欲を生徒が自発的にもつことができるような工夫をしたい。

そこで重要なのが、**授業全体を実際のコミュニケーションの場とする**ことである。形式的な練習や機械的な音読、目的や場面があやふやな言語活動は、「主体的・対話的で深い学び」とは言い難い。話し手の感情や考えが聞き手に伝わり、気持ちが通い合うことが大切なのだ。例えば、以下のような工夫ができるだろう。

- ・題材の背景や登場人物の気持ちを考えさせ、聞き手を意識した音読を行う
- ・やり取りの活動で上手に言えなかったことを他者と共有し、意見を伝え合うことで、自分の表現を広げたり深めたりさせる
- ・発表活動では、自身の発表とともに、他者の発表から学んだことも振り返らせる

基本的な知識・技能を習得させ、活用できるようにさせる役割も忘れてはいけないが、英語教師は、「**あなたならどうするか**」と生徒に問いかけ、**お互いから学ぶ機会を作り、そして誤った表現を指摘し、正しく使えるよう軌道修正をするファシリテーター**なのである。

「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業を展開することは、全く新しい授業を始めなければいけないということではない。私たちが培ってきた経験をフルに活用し、さらなる工夫を少しずつ取り入れていけばよいのではないだろうか。



コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて

田嶋 美砂子
Tajima Misako
(茨城大学)



新学習指導要領では、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて」という文言が繰り返し使用されている。このことは、これまで一技能を構成してきた「話すこと」が「話すこと [やり取り]」と「話すこと [発表]」という2つの領域に分割されたことと無関係ではない。例えば、事前の準備がある程度可能なプレゼンテーション（発表）と、その後の質疑応答（やり取り）では、必要とされる力に相違があり、それぞれを適切に伸長させるには、異なる学習が不可欠である。つまり、新学習指導要領では、ある文脈において従事する言語実践が単方向／双方向であるのか、即興性が求められているのか／いないのかなどを確認しながら、その言語実践の目的を達成していくことの重要性が強調されていると言える。

上述したことは、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」にもあてはまる。何のために、どのような文脈で、どのような人によって話された／書かれたことばを、聞くのか／読むのか、どのような人に向けて書くのかを意識させる指導は、その言語実践に関わる相手をよりよく理解しようとする姿勢を育成することと軌を一にする。そして、そのような姿勢の育成は最終的に、多様な文化的背景を持つ他者と協働し、平和のうちに共存していこうとする心を育むことへとつな

がっていくように思う。

なお、新学習指導要領の解説では、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況など」を学習過程においても設定することの必要性に言及されている。その上で、「①設定されたコミュニケーションの目的や場面、状況などを理解する、②目的に応じて情報や意見などを発信するまでの方向性を決定し、コミュニケーションの見通しを立てる、③目的達成のため、具体的なコミュニケーションを行う、④言語面・内容面で自ら学習のまとめと振り返りを行う」といった手順を踏むことにより、「思考力、判断力、表現力等」が伸長されると謳われているのである。また、学習過程で扱うべき事柄として、「日常的な話題」と「社会的な話題」があげられている。これは、授業で言語活動を導入する際には、生徒の日々の生活に関わることのみならず、社会で起こっている出来事や問題といった話題の提供も求められていることを意味する。このように多岐にわたる題材を扱うことにより、たとえ教室内での言語活動であったとしても、実社会に近い「場面」や「状況」が創り出され、結果として、生徒たちがコミュニケーションの「目的」達成という成功体験を重ねていく一助となるのではないだろうか。



「必要な情報」「概要」「要点」

松沢 伸二
Matsuzawa Shinji
(新潟大学)



「必要な情報」「概要」「要点」は、新学習指導要領の「聞くこと」と「読むこと」の目標ア、イ、ウに用いられている用語である。

「聞くこと」の目標では次のようにこの用語が使われている。

はっきりと話されれば、日常的／社会的な話題について、	【ア】 必要な情報	を聞き取る／捉えることができるようにする。
	【イ】 話の概要	
	【ウ】 短い説明の要点	

「読むこと」の目標でも同様に用いられている。

日常的／社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた	【ア】 ものから必要な情報	を読み取る／捉えることができるようにする。
	【イ】 短い文章の概要	
	【ウ】 短い文章の要点	

聞く行為には目的がいくつかあり、①聞き手が必要な情報を聞き取る「特定情報聞き」(listening for specific details)、②話の全体的な内容を聞き取る「大意把握聞き」(listening for the gist)、③話し手が伝えたいことを聞き取る「要点把握聞き」(listening for the main points) などがある。これらは「聞くことのタイプ」(listening type)と呼ばれる。新学習指導要領の「聞くこと」の目標アは①、イは②、ウは③の「聞くことのタイプ」を

生徒に指導することを示している。

このことは「聞くこと」と同じ受容技能である「読むこと」にもあてはまる。「読むことのタイプ」(reading type)は、読む行為の目的に合わせて、④読み手が必要な情報を読み取る「情報検索読み」(scanning)、⑤話の全体的な内容を読み取る「大意把握読み」(skimming)、⑥書き手が伝えたいことを読み取る「要点把握読み」(reading for the main points) などがある。新学習指導要領の「読むこと」の目標アは④、イは⑤、ウは⑥の「読むことのタイプ」を生徒に指導することを示している。

こうした目的に応じた「聞くこと」や「読むこと」の技能の伸長には、「概要を箇条書きにまとめる」や「要点を表に整理する」などの、目的にかなうタスクに取り組むことが有効である。

以上は「聞くことを学ぶ」(learn to listen)と「読むことを学ぶ」(learn to read)学習だが、外国語の授業では技能に加えて言語知識(語句、文構造や文法事項、音声的な特徴など)も習得する必要がある。これには「必要な情報」「概要」「要点」を把握した後に、スクリプトを用いて詳しく聞いたり、文章を詳しく読んだりして、「学ぶために聞く」(listen to learn)と「学ぶために読む」(read to learn)学習を行い、言語知識を伸長する。



日常的な話題, 社会的な話題とは

池野 修
Ikeno Osamu
(愛媛大学)



新学習指導要領においては、「日常的な話題」と「社会的な話題」が区別され、目標や言語活動はそれぞれのタイプの話題に対して記述されている。「日常的な話題」とは、『中学校学習指導要領解説 外国語編』(2018)によれば、「生徒の日々の生活に関わる話題のうち、生徒にとって身近な学校生活や家庭生活などにおけるもの」である。具体例として、聞くことでは、学校行事における係分担の説明や持ち物等の連絡、天気予報、交通情報、読むことでは、製品の取扱い方、外国の中学生が紹介する学校生活、書くことでは、住んでいる場所や部屋の様子、家族や友人、好きな動植物や飼っているペットなどがあげられている。一方で、「社会的な話題」とは、「社会で起こっている出来事や問題に関わる

話題」のことで、エネルギー問題、地球温暖化の防止、平和問題、人権問題、ICTの普及などがその例にあたる。

新学習指導要領で示されている目標や言語活動は、これら2つのタイプの話題で異なっており、以下の表のように整理することができる。一般的には、「社会的な話題」は「日常的な話題」よりも抽象的で、情報を吟味して筆者の主張(及びその理由)を把握するという意味でより高度の思考力・判断力が求められる。また、聞いて/読んで理解した内容をどう表現活動につなげていくかも課題となる。さらに、言うまでもないが、「社会的な話題」への関心は必ずしも最初から高いわけではないので、興味喚起のために指導の工夫が必要とされる。

	聞くこと/読むこと	話すこと [やり取り] [発表] /書くこと
日常的な話題	必要な情報を得たり、概要を捉えたりする。 (=話し手/書き手が述べていることの大まかな内容を捉える。)	事実や自分の考え、気持ちなどを整理して伝え合ったり、まとまりのある内容を表現(口頭/文章)したりする。
社会的な話題	短い説明/文章の要点を捉える。 (=様々な情報の中から、話し手/書き手が最も伝えたいことは何かを判断して捉える。)	まずその話題について聞いたり読んだりした上で、考えたことや感じたこと、その理由などを述べ合ったり、表現(口頭/文章)したりする。



言語の使用場面・働きと言語活動

谷口 友隆
Taniguchi Tomotaka
(相模原市立大野南中学校)



現在の中学校の授業では、依然として文法・語彙等の知識習得に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成に向けた言語活動が「十分に」または「適切に」行われていないという指摘がある。そんな現状からか、新学習指導要領では、「知識及び技能」を身につけることに加え、それらを適切に運用する力(「思考力、判断力、表現力等」)を言語活動を通じて育成することが繰り返し述べられている。事実、第2章第2節3(2)「内容の取扱い」には、「文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、コミュニケーションの目的を達成する上での必要性や有用性を実感させた上でその知識を活用させたり、(中略)言語活動と効果的に関連付けて指導すること」と示されている。これは文法に関して述べられたものであるが、「言語の使用場面」や「言語の働き」は、「思考力、判断力、表現力等」の内容の「言語活動及び言語の働きに関する事項」に含まれ、「言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにする」とあることから、当然言語活動の中で扱っていくべき事項である。

教師は、「言語の使用場面」や「言語の働き」を指導する際、切り離された文脈の中で、それ単体として扱うのではなく、目的や

場面、状況のある言語活動の中で、生徒が適切な言語材料を取捨選択できるよう、効果的に導入・指導・練習方法を工夫することが求められる。

例えば、「描写する」という「言語の働き」についての指導では、現在進行形と絡めて、次のような授業展開が考えられる。まず、ALTの家族に、学校の様子を紹介するビデオレターを作成して送る、という目的を設定する。学校内の生徒の活動の様子を実際にビデオで撮影しながら、ALTが“Look, the students clean their classroom every day. Now they are cleaning”や“The baseball team members practice hard every day. Now they are running”などと現在形と現在進行形を対比させて、描写するモデルを提示する。その後、音声を消した映像に対し、アテレコで生徒に自由に描写をさせたり、説明を付け加えさせたりしながら指導・練習を繰り返し、ビデオレターを完成させるという目的の中で「描写する」という「言語の働き」を体得させる。

このように目的や場面、状況のある言語活動の中で、「言語の使用場面」や「言語の働き」を扱い、生徒の「思考力、判断力、表現力等」を鍛え、コミュニケーション能力を育成していきたい。



即興的なやり取りの指導ポイント

今井 裕之
Imai Hiroyuki
(関西大学)



新学習指導要領では、「話すこと」が「やり取り」と「発表」の2領域に分けられ、いずれの目標においても「関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合う／話すことができるようにする」とあるように、即興性が明確に求められることとなった。基礎的な「知識及び技能」を学習中の生徒たちに、即興的な会話やスピーチを求めるのは困難かもしれないが、瞬発力や集中力頼みにならない即興性のトレーニングは日々の授業を通じて積むことができる。

即興的な「やり取り」は、CEFRの *Companion Volume with New Descriptors* (2018)によれば、会話の目的・場面・状況によってcreative and interpersonal (雑談等), transactional (お店での取引等), evaluative and problem-solving (議論等)の3種に大別される。各々に会話の特徴はあるが、構成においては「会話の切り出し」「定型的応答」「関連発言」の3要素からなる点は共通する。

例) A: Is that a flute? (会話の切り出し)

B: Yes, (定型的応答) I'm in the music club. (関連発言)

A: Nice. (定型的応答) When do you practice? (関連発言)

「雑談」の会話の発展性は「関連発言」の意外性から生まれるといえるだろう。お店での買い物のような「取引」では「定型的応答」が主になるので意外性は少なく、「議論」では「関連発言」がむしろ主になり、やり取りは長くなる。この会話の3要素を踏まえると、即興的なやり取りへの対策が2点見えてくる。

1点目は、「定型的応答」のトレーニングだ。会話では素早い応答が求められるため、相手の発言内容を理解できれば即答できるような発話パターンを何度も練習する必要がある。多くの先生がたが、帯活動等で実践されている会話パターンのドリルのペア練習は、これに役立つだろう。

2点目は、「関連発言」を想像・創造させることだ。前の会話例であれば、場面・状況が楽器店ではなく学校で、同級生同士の会話であることを踏まえさせて「関連発言」の意図を生徒に想像させる。「AはBのことが好きなんだ」「放課後だったらBはクラブの練習に行きたがっているのかな」等と想像する生徒に、さらに次に続くBの発言を創造させる。この練習を積むことで、「関連発言」は直前の相手の発話ばかりではなく、会話の目的・場面・状況に合わせて発想すればよいことを学ばせることができるだろう。



語彙 (受容語彙と発信語彙)

日暮 滋之
Hidai Shigeyuki
(玉川大学)



新学習指導要領では、中学校で扱う語彙数は1,600~1,800語程度に増加した。さらに、小学校での外国語活動・外国語科では、600~700語程度を扱っている。これらの小学校で扱った語彙は、「聞いて意味を理解できるようにする」「話して表現できるようにする」ことが学習の中心であり、何も見ないで正しく綴れるようになることまでは学習の範囲に含まれていない。しかし、その中にはplay や have といった基本動詞や、実際のコミュニケーションにおいて頻繁に活用されるような名詞が多く含まれており、中学校でこれらの語を綴れるようになるまで指導しようと考え、**中学校での新出語彙数1,600~1,800語に小学校の600~700語を加えた、2,200~2,500語を3年間で私たちは指導しなくてはならない。**改訂前は指導する語数を1,200語程度としていたことから考えるとおよそ1.8~2倍の大幅増といえる。

3年間で2,200~2,500語を扱うにあたり、語の重要度・語数の両観点から、どの語も均等に扱うことはできない。そのため、新学習指導要領では、**受容語彙として「聞いたり読んだりすることを通して意味を理解できるように指導すべき語彙」と、発信語彙として「話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙」とを区別して指導する必要があるとしている。**そのため、指導にあ

たっては、生徒の興味・関心から優先すべき語を選定して指導計画を作成することや、教科書の単語欄の太字・細字等を参照して、語彙指導に軽重をつける工夫が求められる (*NEW CROWN*では、平成14年度版以降、単語欄に太字・細字等を用いて、教える側や学ぶ側に語彙指導や語彙学習の指針を示してきた)。

一般的に、語彙はまず受容語彙として認識され、それが次第に発信語彙として習得されていくといわれている。受容語彙から発信語彙へと定着させていくためには、言語活動に工夫が必要だ。Nation (2001) は、語彙が定着するためには、noticing (単語への気づき)、retrieval (単語を記憶から呼び起こすこと)、creative / generative use (単語を創造的／生成的に使用すること) という一連のステップを踏むことが重要であると述べている。例えば、語彙を導入し意味を理解した後、目的・場面・状況のある言語活動の中でその語彙を思い起こし、自分に引き寄せて友達と話したり、書いたりして語彙を創造的に使用する活動をすれば、無理なく発信語彙に発展させていけるだろう。このような言語活動の工夫が語彙の定着に不可欠といえる。

参考文献 Nation, I.S.P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press.



文、文構造及び文法事項

竹内 理
Takeuchi Osamu
(関西大学)



新学習指導要領の「文、文構造及び文法事項」の扱いを理解するためには、3つの重要なポイントをおさえておく必要がある。

第1は、**小学校における学びの影響**である。外国語（英語）の教科化に伴い、小学校ではbe動詞と一般動詞の肯定文・否定文・疑問文、助動詞can（疑問文も含む）、不規則変化を含む活用頻度の高い過去形（enjoyed, went, sawなど）、疑問詞（who, what, when, where, why, how）、動名詞（目的語の位置）、それに3人称を含む代名詞などが、コミュニケーション活動の中で扱う言語材料として導入されることになる。この影響は決して小さくなく、中学校における文法事項の導入順序や、それぞれの事項の重みづけにも少なからず影響することが予想される。例えば、canについて、平成28年度版の教科書では中学1年生の後半で取り扱うことが多いが、小学校での学習状況を勘案すると、そこまで待つ必要はもはやなくなる。文構造についても、[主語+動詞]、[主語+動詞（be動詞）+補語]、[主語+動詞+目的語]の導入が小学校で行われており、中学校での学びに大きな変化をもたらすことは間違いないであろう。

第2は、**高等学校における学びの中学校への移行部分**である。

従来は高校で取り扱われていた文法事項の中から、現在完了進行形や、仮定法のうち基本的なもの（I wish や If I had, I could）が中学校での学びに加えられることとなった。文構造でも、[主語+動詞+目的語+原形不定詞]（例えばhelp+人+原形不定詞）の学習が中学校で求められることになる。これらの新しい事項を、3年間で420時間という従来と変わらない時間数で取り扱うためには、小学校での既出事項も前提に中学校での学習事項の扱いにメリハリをつけていくことが強く求められる。

第3は、**学びの目的**である。文法事項を学ぶ理由は、これらが「**コミュニケーションを支える**」重要な役割を持つからであり、「**内容を伴う豊かなコミュニケーション**」を円滑に進めるために学んでいるのだ、という目的意識を失わないよう留意したい。このためには、例えば、ルールを先に教える演繹的な指導法ではなく、目的や場面、状況等を設定した中で、使用事例を見せながら生徒の気づきを促す帰納的な教え方を採用する必要がある。また練習の方法も、「自動化を目ざした機械的な繰り返し」（repetition）ばかりを行うのではなく、「習熟を目ざしたさまざまな使用場面の中での繰り返し」（iteration）も取り入れるなど、新たな工夫が求められている。



小学校外国語の教科化によって何が変わるか

酒井 英樹
Sakai Hideki
(信州大学)



2017年度まで小学校の第5・6学年において外国語活動が行われていたが、移行期間を経て、2020年度より教科としての外国語の指導が開始された。外国語活動は開始学年が早まり、第3・4学年において実施される。ここでは、高学年における外国語の教科化による3つの変化を取り上げて解説する。

第1に、かつての外国語活動では「聞くこと」と「話すこと」が中心的に扱われていたが、教科化された外国語では、**すべての領域（「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと[やり取り]」[発表]」、「書くこと」）が系統的に指導される**。「読むこと」と「書くこと」については、音声で慣れ親しんだ語句や表現を読んだり、語句や表現を書き写したり、例文を参考にして書いたりする。また、扱う内容の増加に伴い、年間35単位時間（週1コマ相当）から年間70単位時間（週2コマ相当）に時数が増加した。

第2に、教科化された外国語においては、英語を使うことに「慣れ親しむ」だけでなく、**英語を使う技能を身に付けるところまでが求められる**。『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（文部科学省、2017）によれば、「慣れ親しみ」とは、当該単元で設定している言語活動で必要な語句や表現をその単元の中で導入し、理解したり練習したりして、言語活動を行っている状態とされてい

る。つまり、それまでの授業で扱ってきた語句や表現の使用は想定せずに、また単元後もその語句や表現を使えることを期待しないということの意味する。教科化された後は、英語を使う技能を身に付けるところまで、すなわち学んだ語句や表現を異なる場面でも用いることができるくらいに学びを深めていくことが求められる。例えば、「読むこと」と「書くこと」については、文字の名称を発音することと、文字を書くことについては身に付ける段階まで求められる（ただし、語句や表現は、書き写したり、例文を参考にして書いたりすることができればよいとされており、スペリングを覚えるところまでは要求されていない）。

第3に、教科化された外国語では、扱われる言語材料（英語の特徴やきまりに関する事項）が明示された。しかし、**小学校では体系的に文法を学ぶのではない**ということに留意する必要がある。例えば、過去形が扱われているが、これはチャンクとして用いており、規則動詞や不規則動詞の語形変化などを理解しているわけではない。

以上の小学校での外国語の教科化に伴う変化を踏まえ、中学校英語への円滑な接続を図ってほしい。



「英語で授業」を実践しよう!

金丸 紋子

Kanamamaru Ayako

(カリタス女子中学高等学校)



新学習指導要領のキーワードの1つ「授業は英語で行う」が意味することは、教師が最初から最後までネイティブのように流暢な英語を話すということではなく、授業を実際のコミュニケーションの場面として、教師も生徒も英語を使ったやり取りを十分に展開するということだ。たとえすばらしく流暢なteacher talkであっても、ただただ生徒の頭上を通り過ぎていくようでは、この本質から外れてしまう。そうではなく、生徒の現在の単語や文法、リスニングの力を意識しながら、「耳に優しい英語」を提供し、また、生徒同士の英語でのやり取りを支援することこそ、このキーワードを実現する鍵になるのではないだろうか。そして、ネイティブのようにはいかになくとも、教師が一生懸命に英語を使ってコミュニケーションを取ろうとする姿は、生徒にとって一番身近な英語を発話するロールモデルになるはずだ。

私は、「耳に優しい英語」を話すために、生徒の表情や反応に留意して、teacher talkのレベルやスピードを調節している。生徒たちの表情が戸惑いと困惑を見せ始めたら、ゆっくりジェスチャーを交えながら、語りかけるように話す意識をするだけでも、生徒の理解度は格段に増すだろう。事前に準備ができる場合は、

指示や説明の内容を絵などのビジュアルに用意して見せることで、生徒の理解は促進される。

また、ペアワークやグループワークといった生徒たちが話し合い、教え合う協働学習の場面では、普段生徒たちが日本語で話し合いに使っている表現を英訳し、小さな英語表現集を作成したところ、自信を持ってディスカッションをするようになった。時には、そのリストから表現をピックアップし、意識して使用させることもある。もちろん、こうした表現を教師もteacher talkに積極的に盛り込んでいくことで、生徒は使用のモデルを繰り返し耳にでき、自然と発話につなげることができるだろう。

更に、生徒の英語での発話を後押しする工夫をもう1つ。授業中に生徒を指名し、英語で何かを発話させようとする時、お年頃の中高生は躊躇することもあるだろう。その場合、クラスメイトと話し合ったり、練習したりする時間を30秒だけでも与えると、自信を持って発話ができるようになる。

このように、EFL環境であっても、私たちの様々な工夫や努力によって、教室が教師と生徒の生きたやり取りで溢れる場所になることはできるはずだ。



「言語活動」を共有し、「音と文字の対応への気づき」を生かす小中接続

池田 周

Ikeda Chika

(愛知県立大学)



新学習指導要領において、私たちは、小学校中学年「外国語活動」と高学年「外国語」を通じた4年間の学習経験をもつ生徒と向き合うことになる。特に高学年では、教科として「英語で何ができるようになるか」を意識した学びを行っている。

こうした生徒を前に、私たちは、学びの仕切り直しを行わないということが大切だ。小学校で「中学校に向けた学び」を取り入れているのと同様に、中学校でも「小学校を引き受ける学び」を行う必要がある。その際、小学校で学んだことを活用しながら、認知発達段階や生徒の興味・関心に応じて学びを発展・調整することがポイントだ。次に、具体的な小学校の英語教育の特徴と、中学校での引き受け方の例を示す。

- (1) 小学校の学習内容となったアルファベットの大きな文字・小さな文字は書くことができるまで、さらに語句・表現の書き写しまで指導を行っている。それを踏まえ、中学校では十分な聞く・話す言語活動に続いて、自分の意見を裏付けたりする情報等を参照し、取り込みながら書くことへとつなげるとよいだろう。
- (2) 「音」について、小学校では、「読むこと」の領域において、ある語が発音できたり、意味を解釈できたりするために「音と文字の対応」への気づきを手がかりとして、特に語の「は

じめの音」に着目させている。中学校でも早い段階で、語を構成する様々な位置にある音の取り出し、分析、比較、それを表す文字との結び付け、といった活動をしっかり行うことにより、その後の「綴り」の学習へとスムーズに進むことができるだろう。

- (3) 「言語活動」においては、小学校での様々な活動を通じて聞いた、話したりした表現を、中学校でも類似した活動の中で扱うことが大切だ。want to ... や一般動詞の過去形など、小学校で扱った言語材料を、中学校の教科書の学習単元まで「使わせない(聞かせない、読ませない、話させない、書かせない)」のではなく、どんどん小学校で慣れ親しんだまま用いらせてほしい。また、1つの活動で1つの構文をターゲットとして引き出すだけでなく、活動に目的・場面・状況を設定し、次第に「自分の伝えたいこと」をより豊かに表現するために複数の構文をフル活用させるような活動にまで発展させるとよいだろう。

「小学校での学び」の特徴を知り、その学習内容を引き受け、さらに「中学校の学び」へと高めながら内容も膨らませていく。これが新学習指導要領をうけた「小中接続」の在り方と考える。



中高連携

鈴木 悟

Suzuki Satoru

(東京都立両国高等学校)



「話すこと」の中高連携

3つの資質・能力を身につけるため、小・中・高等学校で一貫した5つの領域別の目標が設定された。高校卒業時を見据えて、中高連携がこれまで以上に重要となる。

「話すこと[やり取り]」を例にとると、中学校では、関心のある事柄について即興で伝え合うことや、日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを伝え合うことが、目標として掲げられている。

高校では、「情報や考え、気持ちなどを話して伝え合うやり取りを続けること」「情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝え合うこと」とされ、中学校での学びを受け、より高度な対話的な活動を行うことが求められている。それゆえ、中学校の段階で、生徒が既習の英語を駆使し、**即興的に話す経験を積み重ねることが連携の鍵**となる。

会話が継続しない不安はあるかもしれないが、1時間の活動で大きな成果を期待せずに、授業の中で、英語でやり取りする機会を増やすことが大切である。そのためにはまず、クラス全体で英語を話す雰囲気を作り、英語で話すことが当たり前環境を作るとよい。また、授業の始めに身近な話題でsmall talkを行ったり、単元の題材への関心を高める活動を対話的に行うことも考えられ

る。高校での学びを見据えて、段階的に発話量や正確さ(質)を高めるような指導ができるとういだろう。

「領域統合」の中高連携—高校での高度化に向けて

中高の新学習指導要領では、聞いたり読んだりして得られた情報や考えを活用し、話す/書くことが目標として掲げられている。つまり、複数の領域を結びつけた統合的な言語活動を行うことが求められている。「話すこと」の領域について、中学校の段階で想定される活動は以下のとおりである。

発表: 読んだり聞いたりしたことについて、プレゼンテーションやスピーチをする。
やり取り: 読んだり聞いたりしたことについて、ディスカッションやディベートをする。

これらの活動を実際に行うには、「話すこと」を中心とした授業を基盤に、領域統合の活動に向けた練習を行うことが必須だ。前述のsmall talkに加え、教科書の本文を読んだ後であれば、事実発問ではない、答えが多様となる問いを与え、ペアやグループで意見を伝え合ったり、発表させたりすることもできる。このような場面を発達段階に応じて増やし、高校でも継続して行われるディスカッションなどの領域統合の活動につなげるとよいだろう。



他教科連携

榎葉 みつ子

Kashiba Mitsuko

(広島大学)



他教科連携とは、学習の効果を高めるために、教科間で学習内容を関連付けたり学習成果を活用し合ったりすることである。

外国語科は、主に2つの目的のために他教科との連携が求められる。まず、言語能力を伸ばすための**国語科との連携**である。例えば、事実と意見を区別して話すことは、議論の際などに大事なことだ。国語科では、「事実と意見との関係に注意して話すこと」を第1年次に指導する。また、「事実と考えを分けて整理して話したり書いたりすること」は、外国語科における目標でもある。この例に限らず、多くの目標を共有する国語科と外国語科とが学習内容や言語活動等で連携を深めることは、生徒の言語能力を育成する点で、非常に効果的だと考えられる。学習の基盤である言語能力を高めることは、ひいては学校全体での教育活動により影響を与えることにもなる。

もう1つは、深い学びのために、**他教科での学びを外国語科における学びとつなげる**ことだ。他教科で習得した知識や技能が外国語科で活かされる典型的な例としては、他教科で学んだものと類似した題材を外国語科で扱うことが考えられる。社会科と家庭科の例を挙げてみる。外国語科で「先住民の文化の保護」に関する題材を扱う場合には、社会科の授業で、多文化社会における

課題として「先住民との関係」を考察した学習の成果が活用できるだろう。生徒にとっては、社会科で扱った課題と関連していることから、外国語科の題材にも興味を持ちやすいし、背景知識として、題材内容の深い理解の助けとすることができる。また、感想や意見を表現する際は、考えを形成するための情報として役立つこともできるだろう。家庭科との連携であれば、「地域の食材を用いた和食の調理」での学びは、外国語科において「地域の食文化」に関する題材を扱う際に、社会科の場合と同様に活かすことができる。実習を伴う家庭科と外国語科とで同時期に扱えば、「地域の食文化」に関する学習は、生徒にとって、より身近で価値のあるものと感じられることだろう。

聴解や読解の際、また、表現させる際に、**生徒の持つ背景知識や経験(内容スキーマ)**を用いさせることは、外国語科の授業で、これまでも行われてきた。今後は目標が高度になり、社会的な話題について考えや感想を表現できるようにすることが求められるが、その際に他教科で得た知識を積極的に活用することは、外国語科においても当然のことになる。外国語科と他教科との連携は、中学校の先生がたが、今まであまり知らなくてもよかった各教科の学習内容に改めて関心を持つことから始まる。



カリキュラム・マネジメント

吉田 晴世
Yoshida Haruyo
(大阪教育大学)



カリキュラム・マネジメントは、教科等横断的な視点から教育活動の改善を行うことや、学年や教科等を越えた組織運営の改善を行うことを求めている。次の3つの側面を示している。

1. 教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
2. 調査や各種データ等に基づき、評価して改善を図るPDCAサイクルを確立すること。
3. 教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用すること。

次に、改善のための具体的な取り組みを示す。

教科等間のつながり

教科等間のつながりを踏まえた学習を進める観点から、教科等間の内容事項について、相互の関連付けや横断を図る体制を整える必要がある。教育活動相互の関係を捉え、教育課程全体と各教科等の内容を往還させる試みが必要となる。

学校全体としての取り組み

校長は、教科等の縦割りや学年を越え、学校全体が取り組めるよう学校の組織運営の見直しを図る必要がある。また、管理職

のみならず全ての教職員が、教育課程全体の中での位置付けを意識しながらカリキュラムを組む必要が生じる。

「アクティブ・ラーニング」との連動

形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善にとどまるものではなく、子どもたちの質の高い深い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それを通じて、学習の在り方そのものを原点から見直すものである。

地域連携

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育み、学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができることを求めている。

小中高一貫教育

外国語学習の特性を踏まえて「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を一体的に育成するとともに、その過程を通して、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、「聞くこと」「読むこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「書くこと」の5つの領域で英語の目標を設定している。



外国語科におけるICT活用

堀田 龍也
Horita Tatsuya
(東北大学)



授業でのICT活用については、これまでたくさん検討されてきた。現状では、主に教師が、写真・映像や音声、あるいはピックアップカードやフラッシュカードなど、これまで紙またはアナログで提示して活用してきた提示用教材を、教師用端末で大型提示装置に映して指導するという例が多い。

2020年1月に成立した補正予算により、今後、小・中・高等学校に、高速大容量の無線ネットワーク環境が整備され、児童生徒1人1台の情報端末を活用した授業が想定されている。

教師がteachingのためにICTを活用することと、児童生徒がlearningのためにICTを活用することは、パラダイムが大きく異なる。これからの授業では、1時間の授業中にこの両方が学習場面ごとに入れ替わり、また共存していくことになる。

児童生徒が1人1台の情報端末を常に活用できる状況になった場合、外国語科の学習で何が実現可能になるのだろうか。

まず、学習者用デジタル教科書を活用することができる。学習者用デジタル教科書は、質保証がされているコンテンツである。外国語科の学習者用デジタル教科書の多くは、自由に拡大したり、重要だと思うところに付箋をつけておいたり、ネイティブの音声を再生したりできる。その分、自分の興味や理解に合わせて学習し

やすい。

また、外国語科には多くのデジタル教材が存在する。それらのデジタル教材の中には、自分のペースでリスニングができたり、ドリルの学習ログによって診断をしてくれるものもある。さらに、遠隔地からオンラインで提供される講義等の学習動画を用いて学ぶこともできる。

上記のように、学習用のコンテンツを用いて学ぶことの他に、1人1台の情報端末を常に活用できれば、それらのコンテンツの中で重要だと思う内容を記録し、後にライティング等で利用することもできる。従来のノートでもできることのように感じられるかもしれないが、学習者から見た情報のインプットとアウトプットが情報端末を用いて同じプラットフォーム上でできるようになることで、知識不足のことを調べ、新しく得た情報を使って表現し、さらに不明瞭なことを調べるなど、インプットとアウトプットの循環が生まれやすいことが特長である。

外国語科において学習者がICTを活用することの最大の効果は、ライティングとプレゼンテーションの距離が近くなること、個別学習と対話的な学習が近くなること、その転換が早くなることにより、学びが深まりやすいことである。



Cameron Blain (Myojo Gakuen Elementary School)

Teachers are busy people. According to a recent OECD survey, some of the busiest teachers in the world are found right here in Japan. Finding time to properly plan your classes can be difficult. In a team-teaching scenario, it can be near impossible. For this reason, it is imperative you and your teaching partner use your precious time together wisely. The following are a few simple tips that can help you get the most out of your team-teaching lessons.

First and foremost, it is important to get to know your teaching partner. Talk about what each of you feel comfortable doing in the classroom. With limited time to prepare, knowing each other's strengths can help keep teaching expectations clear and classes running smoothly.

Next, don't be afraid to try out new ideas that haven't been planned out in detail. Tweak your lessons during the class. The best feedback comes from your students. If things aren't working, don't give up. Be flexible, adaptive and make changes. You can do this by offering constructive suggestions to one another like, "How about we try changing the rules next time, Mr. Sato?" or "I have a good idea that might work, Mr. Blain", which leads us to our next tip – be real.

Our job as English teachers isn't just to teach a language, but to show our students how people from all backgrounds can communi-

cate successfully. Problem-solving is a perfect example of what authentic, meaningful communication looks like. If things aren't going as planned, don't hesitate to voice this to your teaching partner and to the students. In short, honest communication is meaningful communication.

Finally, be clear about what your lesson's goal is. This should take no longer than a minute or two, but needs to be confirmed before entering the classroom. It is important that you and your partner know exactly what you hope to achieve by the lesson's end. Further, having a quick (and honest) chat after your class will help insure that you and your partner don't make the same mistakes twice.

Team-teaching is a unique chance for both teachers and students to experience real life communication, but there is no question it has its challenges. With time of the essence, you and your partner need to be flexible and communicative. Most importantly, if things don't go exactly as planned, embrace it as an opportunity to show your students what real communication looks like first hand.

Article: "Japan's junior high school teachers face longest average working hours in OECD survey", *The Japan Times*. June 20, 2019. Retrieved from <https://www.japantimes.co.jp/news/2019/06/20/national/japans-junior-high-school-teachers-face-longest-average-working-hours-oecd-survey/#.XjzsDTEzblU>

NATTOKU!

7

リクツで納得! 学校英文法の「文法」 巨理 陽一 (静岡大学)

ケイタイは音の問題



“evidence-based”という言葉を見る機会が増えた。この表記では気づかないが、カタカナで書いたり実際に発音したりする場合「エビデンス・ベースド」とする人が少なくない(ドは/d/とは異なるという問題は今は措く)。「ベースド」という表記ないしは発音に出会うたび、「ああ、この人は -ed → /d/と覚えたんだな」と思う。かくいう私もそういう学習者の一人だった。

前回取り上げたimpossibleのim-が否定の意味を表す接頭辞であるのに対して、-edは過去時制もしくは過去分詞を表す接尾辞である。いわゆる「過去形」の指導の際、形式(語形変化)の指導に重きが置かれるくらいがあるが、形態素を扱う際にはもっと音声面に注意を向けたほうが良い。音声的なリクツがわかれば綴りに対する納得も深まるからである。

-edの発音には、/d/, /t/, /ɪd/の3つの可能性がある。これは動詞の原形の語尾の発音によって決まる。

- /d/と発音: /d/以外の有声音で終わる語
- /t/と発音: /t/以外の無声音で終わる語
- /ɪd/と発音: /d/, /t/で終わる語

ポイントは、この規則は表面的な綴りではなく、あくまで音に基づくということだ。baseは綴り上はeで終わっているが、発音は/beɪs/で、無声音で終わる。そういうわけでbasedは「ベースド」ではなく「ベイスド」なのだ。なぜこのような規則になる

かと言えば、その方が滑らかに発音できるからである。試しに/s/の直後に/d/を発音してみるとよい。続けて発音するのも/d/を強く発音するのも難しいはずだ(逆に言うと「ベースド」と発音している人は「ス」が有声音になっている可能性が高い)。

接辞(affix)には、baseのような語根(root)に付け加えられることで意味を生み出す接頭辞・接尾辞に加えて、もう一つ超分節接辞と呼ばれるものがある。英語の場合は、強勢位置の移動がそれを担う。いわゆる「名前動後」というやつで、record(動詞) → récord(名詞)のように、多音節動詞の強勢が先頭の音節に移動することで、その動詞で表される行為の「産物」を意味する名詞となる(Payne, T. E. (2010). *Understanding English grammar*. Cambridge University Press. Ch. 4)。綴りに変化がなく音声だけの変化であっても、形態素の問題になるのだ。

形態素には、接語(clitic)と呼ばれるものもある。前後の宿主的な語に音声的なつながりを持つことで文法的関係を示すもので、この観点では冠詞は接語に分類される。冠詞は名詞に付くと説明されるが、an evidence-based modelのようにaがan /ən/となり、in the early daysのようにtheがði/と発音されるのは、modelやdaysによるものではなく、すぐ後の単語が母音で始まるからである。冠詞+名詞の2語のうちの良いが、上のような例に出会った際のこのズレが学習者を混乱

させている面が少なからずあり、この点で冠詞は名詞にではなく名詞句に付いていると捉えたほうが良い。

語根・接辞・接語に加わる形態素の最後の要素として、語幹変化(stem change)がある。接辞や接語のようなかたまりを足すというより、語幹の母音を変えたり子音を足したりするもので、いわゆる「不規則変化」する(ゲルマン語由来の)名詞(mouse → mice, foot → feet)や動詞(sing → sang, bring → brought)が属し、入門期に登場する多くの動詞がこのグループに当てはまる。

当然ながらbroughtを/brɔ: d/と発音する生徒はいないだろう(それでは別の単語になってしまう)。音声的に見ればこれはチャンスだ。他にもbuy, catch, feelなど、過去形が/t/で終わる動詞は複数ある。その音声的特徴から「英語の過去時制の語尾は/t/か/d/の音で表される説」を思いつく学習者が現れたらしめたもので、冒頭の「-ed → /d/」の罫はいくら回避しやすくなるだろう。もちろん、drinkやgrowのように、この説をすぐに否定する動詞が英語にはたくさんある。しかし、それらと似た動詞を探して整理してみれば、それはそれで不規則変化動詞が言うほど「不規則」でもないことが分かる。授業を聞かずに、英和辞典の不規則動詞変化表から「独自の」規則を見つけ出しては悦に入っていた中学生の私が「ベイスド」と発音するようになるのはずっと後のことである。

小学校から見た小中接続(2)

— 指導と評価 —

中西 浩一 Nakanishi Koichi (平安女学院大学)

① 中1・1学期における指導の留意点

2019年度は学習指導要領の移行期間ということもあり、各中学校区内の小学校での実践は実施時間数等も含めてまだ足並みが揃っていない場合もあると思います。2020年4月入学の生徒の英語力や学習意欲には差があるかもしれません。そこで、気をつけておきたい点が3つあります。

1つめは文字指導、特に小文字です。小文字の習得は小学生にとって簡単ではありません。学校外で英語を習っている児童もあり、現時点ではその習得状況には個人差があります。小学校で使用していたワークシートを利用する等して、生徒の習得状況をまず確認しましょう。文字の習得は中学校での学習をスムーズに進めていくうえで大変重要です。

2つめは言語活動です。小学校ではコミュニケーションの目的や場面、相手等を踏まえた言語活動をかなり重視しています。新学習指導要領においては、「聞く」「話す」だけでなく「読む」「書く」も含めた「思考・判断・表現」の観点を評価する場にもなります。「知識・技能」もチャンツやゲーム等の「練習」活動ではなく「実際のコミュニケーション」を通して評価します。これまで言語活動には「練習」も一定含まれていましたが、今後は別の活動になりますので中学校においても留意が必要でしょう。

3つめは文、文構造及び文法事項の指導です。日本の言語学習条件下で英語を外国語として学ぶ以上文法の習得は欠かせません。ただしそれは単なる文法の知識ではなく、あくまで「コミュニケーションのための文法」です。例えば、小学校では言語活動を通して語順等に気づくという暗示的な指導が中心です。一方、中学校では明示的な指導も必要になります。両者のバランスに配慮するとともに、コミュニケーションのために必要であることを生徒が自覚できるように指導したいものです。

② 「育てる評価」と「記録する評価」

小学校では「育てる評価」、いわゆる形成的評価をととても大切にしています。授業における「記録する評価」でCになった児童には、次の「記録する評価」でB以上が達成できるように授業の内外で丁寧な個別指導を行います。どの教科等においてもすべての児童がB以上を達成することをめざします。学級担任がほとんどの教科を担当している小学校ならではの手厚い支援です。

また小学校に定期テストはありません。基本的に単元の単位で評価を行います。前述のように「育てる評価」を駆使しながら、「記録する評価」で各観点をABCで評価します。

中学校においても、「育てる評価」を効果的に活用するとともに、定期テスト等のペーパーテストやパフォーマンステストだけでなく、行動観察や生徒の自己評価（振り返り）等も含めた、多角的・多面的な評価を一層進めていきましょう。

③ バックワード・デザイン

小・中学校の英語教育は、今後、小学校4年間、中学校3年間の計7年間というスパンで行われます。中学3年時の到達目標を小・中学校の教員が共有してそれぞれの指導や評価にあたる必要があります。高校の入試問題や中学校の評価規準・評価方法等も校区の小学校の先生と共有しましょう。

そして年間到達目標や単元到達目標から逆算してバックワードで学習指導評価計画を作成しましょう。定期テストやパフォーマンステスト等は、年度や学期の初めに作成することをおすすめします。例えば1年生であれば、小学校での学びをもとに、1学期中間テスト、期末テスト、パフォーマンステスト等でどのような到達目標や内容を設定し、1学期の授業を行うのかを4月に授業担当者間で共有しましょう。

そして各単元の到達目標、学習計画、評価規準を生徒に配り、生徒が主体的に学習に取り組めるようにしたいものです。

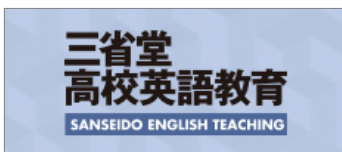
三省堂 機関誌アーカイブのお知らせ

三省堂教科書・教材サイトでは、三省堂が発行している機関誌(情報誌)を最新号からバックナンバーまでご覧いただけます。

小学校・高等学校の機関誌(英語)の紹介



まだまだわからないことだらけの小学校外国語の教科化。
先生がたの抱える疑問や不安を少しでも解消できるよう、文部科学省の最新の動向や情報、授業に生かせる活動案やヒントなどを提供しています。



高等学校の外国語科について、学習指導要領をはじめ教科を取り巻く情報の分析や解説、時代に即した新たな授業の取り組みを紹介。
今日の授業のヒントから、これからの展望までを見通すことのできる情報誌です。

▶ アクセスはこちらから

<https://tb.sanseido-publ.co.jp/kikanshi/>



NEW CROWN — これまでと、これから

三省堂は1881年(明治14年)に創業し、今年4月8日で139周年を迎えることができました。これもひとえに教育関係者の皆様のご支援の賜物と感謝申し上げます。139年の歴史はまた三省堂の教科書発行の歩みでもあります。

1899年(明治32年)に中等学校用英語教科書を発行し、1916年(大正5年)には現在小社の代表的書名となっている『クラウン』を冠した『クラウン・リーダーズ』を発行しています。以来、明治から大正・昭和・平成、そして令和の五代にわたって教育現場に寄り添う、創意工夫した教科書づくりを実現してまいりました。

2020年度より、新しい学習指導要領が小学校から順に実施されます。わたしたちを取り巻く環境は急速に変化しており、そのような予測困難な時代においては、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動する力が求められます。

三省堂では、このような時代の要請に応えた新しい『NEW CROWN』はもちろん、小学校『CROWN Jr.』、高等学校『CROWN』『MY WAY』『VISTA』とあわせ、一貫した教育理念に基づく英語教科書を発行し、新たな歴史を築いてまいります。

三省堂の英語教科書 この40年



昭和53年度版



昭和62年度版



平成28年度版

本物の英語「発信力」をつける辞書 「話す」「書く」にも役立つ単語学習に

エースクラウン英和辞典 第3版

投野由紀夫 [編] B6変型判 1,856ページ 定価(2,800円+税)

「話す」「書く」の基本は
まずこの58語から!

新デザインの
「フォーカス
ページ」

新学習指導要領で
数が増える学習語を
身につけるための指針を!

「CEFR-Jロゴ」
「中高教科書ロゴ」

NEW

チャンク学習で
発信力アップ!

新コラム
「チャンクで
おぼえよう!」



クラウン Basic, Standard 大幅改訂! チャンクで英単語

[Basic] **[Standard]** **[Advanced]**

東京外国語大学教授 投野由紀夫 編

CAN-DOによる
カテゴリイズで
さらに発信力アップ!



チャンク学習で
4技能を
飛躍的にアップ!

チャンクで覚えれば、そのまま英作文や英会話
に使えます。一つひとつの単語をより確実に覚
えられるので、リーディング力ももちろんアップ。

発信力を高める
2ステップ!

チャンクからセンテンスへ、2ステップの学習で、
着実に発信力を高めることができます。

充実の単語情報!

フォーカスワード・単語コラム・多義語など、単語
情報が満載。楽しみながら英語の理解を深める
ことができます。



Basic	中学～高校標準レベル	本体価格 790円+税	B6判・320頁
Standard	高校標準～共通テストレベル	本体価格 900円+税	B6判・384頁
Advanced	高校標準～入試発展レベル	本体価格1,000円+税	B6判・408頁

無料音声

スマートフォンアプリで
聴くことができます。



三省堂 教科書・教材サイト

<https://tb.sanseido.co.jp/>

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 TEL 03(3230)9411(編集)・9412(営業)

■大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3 TEL 06(6341)2177

■名古屋支社 〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31協和丸の内ビル2F TEL 052(953)9211

■九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1 TEL 092(531)1531・1532

■札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1ラスコム15ビル3F TEL 011(616)8722